

ヴィクター・ローウェンフェルドの美術教育研究

—アメリカの美術教育理論と日本での受容—

Viktor Lowenfeld's Art Education Research

—Art Education Theory in USA and Its Acceptance in Japan—

辻 泰秀*・山田 唯仁**

TSUJI Yasuhide and YAMADA Yuito

1. はじめに

美術教育論の研究として、海外の著名な美術教育者の文献の内容について改めて考察してきた。美術教育に貢献した人として名は知られていても、実際にどのような理論を展開し、その影響がいかなるものであったのかは、確かめられていないことがある。そのような状況から、昨年度には、ハーバート・リードについて、『芸術による教育』の内容やリード研究の現代的意義について述べた¹⁾。本稿では、ヴィクター・ローウェンフェルド (Viktor Lowenfeld)²⁾ の美術教育論を取り上げる。

ヴィクター・ローウェンフェルド (1903～1960) は、オーストリアで生まれ、ウィーン美術アカデミーで美術制作、ウィーン大学で教育や美術史を学んだ。そして、15年間の盲学校での勤務の後、イギリスを経てアメリカに渡り、1946年にアメリカのペンシルバニア州立大学の美術教育の教授になっている。ドイツ語圏で学び、ドイツのミューズ教育を土台としたが、オーストリアにおいてナチスによるユダヤ人に対する迫害があり、母国を離れることになった。イギリスにおいてリードとの交流が行われたという³⁾。ペンシルバニア州立大学の教授として、美術学部長をするとともに、後進の研究者の育成にも取り組んでいたが、57歳で他界した。アメリカでは大学院博士課程が整備され、美術教育の先駆的研究が行われてきたが、ローウェンフェルドがその基礎を築いた。代表的著書である“Creative and Mental Growth” (創造的ならびに精神的成長 1947 邦訳書 『美術による人間形成』) には、ローウェンフェルドの科学的・心理学的な研究手法がいかされ、児童画における発達段階の定説にもなってきた。

ローウェンフェルドの著書は、日本でも『児童美術と創造性』⁴⁾、『美術による人間形成』⁵⁾、『子どもの絵』⁶⁾ が翻訳・出版され、ローウェンフェルドは海外の代表的な美術教育者として知られている。訳出された『美術による人間形成』は、650頁余というヴォリュームのあるものであり、30版程まで増刷されたことから、ハーバート・リードの『芸術による教育』とともに、美術教育を学ぶ上での基本文献であるといえる。なおリードは、ユングの心理分類を参考にして、美術の各様式を子どもの造形表現にあてはめていく方法をとっている。ローウェンフェルドも、写実的な表現に向かう視覚型に加えて、表現主義的な触覚型 (非視覚型) を位置付け、子どもの表現の特徴を示そうとした。発達段階や描画のタイプを明らかにするためには、多くの子どもの作品を収集・分析することが求められ、そこに美術教育の研究者としての専門性がいかされた。視覚型と触覚型 (非視覚型) をはじめとしたローウェンフェルドの研究内容は、リードからも高く評価された。

オーストリア生まれのローウェンフェルドには、オーストリアで子どもの絵のすばらしさを見いだし造形教育の実践をしたフランツ・チゼック、深層心理学や精神分析学の中心になったジークム

*岐阜大学教育学部

**岐阜大学大学院教育学研究科

ント・フロイト、オスカー・ココシュカやエゴン・シーレなどの表現主義的な画家、ペスタロッチやフレーベルなどの教育学の影響がある。また、アメリカの著名な教育学者であるジョン・デューイの生活経験を重視する思想にもとづいているという指摘もある⁷⁾。ヨーロッパの様々な学的成果をふまえながら、アメリカで発展させたともいえる。

ヴィクター・ローウェンフェルドが著名な美術教育者であることはいうまでもないが、ローウェンフェルドの文献の内容、日本におけるローウェンフェルドの受容については、手付かずの部分が多い。ちなみに、ローウェンフェルドの業績として、①創造活動の変化を発達段階にまとめた（創造活動の発達段階説）、②創造活動のタイプを分類し、個に応じた指導の必要性を説いた（視覚型と触覚型）、③米国の美術教育研究の基礎を築いた（研究者の育成）の3点を指摘されている⁸⁾。この視点を参照しながら、ローウェンフェルドに関する文献研究を中心に述べることにする。

2. 『児童美術と創造性』から

ローウェンフェルドは、オーストリアの盲学校において弱視者や盲児を教えた際の作品の研究をもとにして、1938年に『児童美術と創造性』を出版した。日本では、水沢孝策によって1960年に翻訳・出版されている。水沢はハーバート・リードの『芸術による教育』の訳者でもあり、早くからリードやローウェンフェルドに着目している。

ペンシルバニア州立大学に着任する以前、盲学校勤務時代に執筆したものなので、ローウェンフェルドとしては、初期の研究にあたる。ただし、当時から、ローウェンフェルドは、表現のタイプとして、対象を写實的に描写しようとする視覚型と、主観的に感じたままに表現しようとする触覚型（非視覚型）があることを意識していた。弱視者や盲児は、視覚による情報が制限され、触覚等の情報により表現するので、触覚型（非視覚型）の特徴が出やすい。触覚型（非視覚型）をハプティック・タイプと呼んでおり、その造形表現の特徴や独自性を弱視者や盲児の多くの作品や事例から明らかにしようとした。「芸術的経験の出発点は、必ずしも視覚の経験でなければならないわけではなく、起源がハプティックの場合もあり得る」とし、「表現主義的な形式は、主観的態度および肉体的経験をその土台とする」「表現主義的芸術の世界は、表現の世界、感情の世界、主観的過程の世界である」という⁹⁾。

各章の構成は以下のようなものである。

- 緒論 盲人の芸術についての従来のかた
- 第一章 画を描く能力の条件
- 第二章 弱視の定義
- 第三章 表現の手段としての児童画
- 第四章 視覚的知覚と触角的知覚
- 第五章 二つの造形のタイプ
- 第六章 弱視の生徒の画の分析
- 第七章 芸術における主観化的態度と客観的態度との関係

美術教育全般にわたる理論というよりも、弱視者や盲児を対象についての記述になっており、内容としては、特別支援教育や心理学の専門書に近いのかもしれない。本書の意義として、盲学校において実践をして、多くの指導場面や作品を考察するという姿勢は、教育研究者としてのモデルを示している。また、安易に結論を導き出そうとするのではなく、多くの作品の中から一つひとつ対象の児童や作品を心理的な手法によって詳細に分析することに、美術教育の実証的研究の方法が見

られる。そして、多くの作品から二つのタイプ、とくにハプティック・タイプに着目する研究内容は、以後のローウェンフェルドの美術教育論の中心になっていく。

3. 『美術による人間形成』における美術教育のあり方

“Creative and Mental Growth”（邦訳書：『美術による人間形成』）は、ローウェンフェルドの美術教育研究の集大成といえる著書である。美術教育の理論が詳細に述べられており、米国のみならず、日本にも大きな影響を与えた。なお、わが国には1963年に竹内清・堀ノ内敏・武井勝雄らによって邦訳され、黎明書房より出版された。本書にみられる美術教育論は、実証的な研究方法に基づいていることが特徴としてあげられる。芸術学や心理学をはじめとする様々な学問領域による論理構成や、膨大な数にわたる子どもの作品への数値的な分析に基づき論を展開している。本書の重要性から、重点的に内容を検討する。

本書における美術教育論を検討するにあたり、はじめに背景となる思想についての整理を試みる。ローウェンフェルドの美術教育論は、創造活動を通じた人間形成を目的としている。一般的には、「美術」とは完成した作品を指すことが多い。美術教育には専門的な技能や知識の教授を目的としたものもある。これらは芸術のための教育であるといえ、より専門的な技能を高めることや、芸術家の養成を目指すという性格が強い。一方で、ローウェンフェルドは、美術を教育のためのものとして捉え、美術による教育を前提としている。この前提から、美術における創作の過程を重要視している。美術教育の在り方について、次のように述べている。

「美術教育においては、美術は目的に対する手段としてのみ用いられるもので、それ自体が目的ではないと、はっきりということができよう。創造性がどこで発揮されようとも、人々がいつそう創造的になるように創作過程を利用することが美術教育の目的である。」¹⁰⁾

上記のように、ローウェンフェルドの思想は、美術教育により民主主義的な社会に必要となる創造的な人格を育成するといった性格が強いといえる。このような「人間形成としての美術による教育」と「専門教育としての芸術の教育」を比較すると、その目的が大きく異なることがわかる。

ローウェンフェルドの美術教育論では、創作の過程において子どもがどう学習するのかということが重要とされている。教育としての根本的な目的が、作品を作り出すこと自体ではないという考えによるものであり、創作活動を通し、子どもによりよい経験を与えることこそが、教育における美術の目的であるとされる。このような考えに基き、その過程を充実させるため、創作活動のあり方への検討がなされることとなる。

ローウェンフェルドは創作活動において、子どもの創造的な発達のために外部からの影響を避け、生まれながらの性質や能力に基づいた成長を促すべきであると主張している。これもローウェンフェルドの論の特徴である。

「もしも子供が、外界からなんの干渉をも受けずに成長するとしたら、彼らの創作活動には、特別の刺激は必要なだろう。子供は誰でも、自分自身の表現の種類に安んじて、深く根ざしている創造衝動を、なんらの禁制もなく行使することであろう。このように、自分の自然の創造に安住するということは、現に、わが国の人々との間でも、文化の中心から遠く離れた地域に住む人達や、広告、奇妙な本、教育の影響などでゆがめられていない人々を見れば明らかである。」¹¹⁾

また、特にぬり絵や練習帳などによる学習は、画一的で訓練的に推し進められる教育方法でるとして非難ともいえる態度をとっている。大人概念を植えつけることが創造性を失わせることにな

り、その結果として子どもひとりでは制作できなくさせてしまうと述べている。これらからローウェンフェルドの美術教育論が、子どもが生まれながらにもっている創造への欲求を行使させ、成長を促すことを重要視していることがわかる。このような生来の発達、子どもの創造性を進歩させるとともに感受性を鋭くさせ、より美術的な作品を制作する能力へと繋がるという考えであるといえる¹²⁾。

またローウェンフェルドは、人間形成を目的とする美術教育を述べるにあたり、美術の特性に着目している。数ある美術の特性のうち、教育において大きな意義をもつものとして「自己同一化」の機能があるとされる。本書では、自己同一化について、「自分のしていることの中へ自ら溶け込んでいったり、人の要求に同情したりする能力である」¹³⁾と述べられている。なお、美術教育における自己同一化について述べられている文に以下のものがある。

「よく釣合いのとれた人間となるためには、自分のすることに自己同一化することが根本であるし、隣人と協調するためには、隣人の要求に自己同一化することがもっとも重要な前提となり、これらは確定的なことである。したがって、われわれの生活における自己同一化の能力は、平和な社会の中で共存する能力とほとんど同じものになるのである。」¹⁴⁾

このようにローウェンフェルドは、人間形成にあたり自己同一化の能力が重要であると捉えている。また、この能力を養うにあたり、美術における創作活動が優れた方法であるとしている。自己同一化と創作活動の関係について、「美術表現は、表現材料がなければできないが、それと全く同様に、表現された経験に自己同一化して、感情が伴わなければ、表現はできない。これは創作活動の極めて本質的な要因の一つである。」¹⁵⁾と述べている。

ローウェンフェルドの論は、美術を教育の手段としてのみ用いるという点が強調されがちである。しかし、創作活動の性質に基いているともいえる。内省したり、他者へ共感したりすることを可能とする美術の性質が、民主的な社会における重要な要素であるという点に、人間形成を目的とする教育における創造活動の意義がある。また表現の能力は、創作への過程において養われるものであり、子どもの欲求をより満たすために必要となる要素である。先に検討したようにローウェンフェルドの論は、専門的な技術を高めることを目的としてはいないが、創造性と感受性を高めることで美術的な能力を発展させることを前提としている。このことから、美術的な学習の要素を切り離していたわけではないことがうかがえる。

4. 『美術による人間形成』における発達段階説

本書にみられるローウェンフェルドの代表的な研究業績として、子どもの創造活動における発達段階説を展開したことがあげられる。この発達段階説では、精神的な発達と創造性の関係について指摘されている。さらに、発達の段階に応じた評価方法や教育支援の方法を詳細に論じている。本書に示されている内容を概観すると、次のようにまとめることができる。

- ①自己表現の最初の段階＝なぐり描きの段階(2歳から4歳)
- ②再現への最初の試み＝様式化前の段階(4歳から7歳)
- ③形態概念の成立＝様式化の段階(7歳から9歳)
- ④写實的傾向の芽生え＝ギャング・エイジ(9歳から11歳)
- ⑤擬似写實的段階＝推理の段階(11歳から13歳)
- ⑥決定の時期＝創造活動にみられる青年期の危機(13歳から17歳)

この説を論じるにあたりローウェンフェルドは、各発達段階の特徴について詳細に述べている。なお、発達段階の詳細は、①(発達段階の)特徴②人物③空間④色彩⑤デザイン⑥刺激題目⑦技法といった7つの項目により述べられている。発達段階の特徴についての記載を抜粋し、ひとつの表に編集すると表1のようになる¹⁶⁾。

表1 発達段階説の要約

年齢	発達段階	特徴
2歳から4歳	なぐり描きの段階	なぐり描きから、以下の特徴がみられる。
	(1) 未分化	運動感覚的経験。動作はまだ制御されていない。
	(2) 経線	一定の動作の反復運動感覚的動作と視覚との間に連合を作り出す。動作が制御される。
	(3) 円形	別種の動作に発展。自由自在に線を引き得ることで自信を得る。
4歳から7歳	様式化前の段階	(4) なぐり描きへの注釈 運動感覚的思考から創造的思考へと変化する。 動作がしばしば切断される。
		(1) 絵と思考と現実との間の関係を発見。 (2) 概念を探す。 (3) それを不断に探し求めて形態象徴が絶えず変化する。
7歳から9歳	様式化の段階	人と環境についての一定の概念を発見する。 形態象徴、すなわち「様式」の反復を通して自信を得る。 純粹様式においては、意図的経験は表現されていない。「人間」「木」など、単にそのもの自体である。 幾何学的線の使用。
9歳から11歳	写実的傾向の芽生え	(1) 幾何学的線(様式)から離れる。 (2) おとなとの協力に欠ける。 (3) ギャング・エイジ。 (4) 性についての自己意識の拡大。(少年としての少年。少女としての少女。)
11歳から13歳	擬似写実的段階	知性の発達。しかし、まだ無意識的。 自然主義的態度(無意識的)。 視覚的傾向と非視覚的傾向。 動作や劇的物語を好む。
13歳から17歳	決定の時期 青年期の危機	環境と描写の効果に対する批判的自覚。 視覚型、触覚型、あるいは中間型の明確な決定。 ・視覚型(媒介物:眼。主要な創造的関心:単なる観察者として感じる外界の印象。) ・触覚型(媒介物:身体。主要な創造的関心:感じたままの情緒的表現。)

またローウェンフェルドは、創作活動における子どもの成長の状態を理解するための、評価表を作成している。子どもの一般的な成長を理解するために用いられる一般的評価表では、「客観的基準」と「自己同一化の程度」、「成長の各面『属性』」といった項目を設けている。なお本書には、発達段階ごとの評価表も掲げられている。こちらは一般的評価表における「成長の各面『属性』」をより詳細にしたものとなっている。項目は①知的成長②情緒的成長③社会的成長④知覚的成長⑤身体的成長⑥美的成長⑦創造的成長についてである。各項目につき、子どもの様子についての細かな問が設けられている。問に対し「ない」、「いくらか」、「おおいに」の3段階に評価する仕組みとなっている。

発達段階説やそれに基づく評価表から、本書では美術教育における理論と支援の方法について示されている。ここまで検討したローウェンフェルドの論に基づいて、教育支援の実践的なあり方について検討すると、次のことがいえる。なぐり描きを主な表現とする発達段階の子ども(2歳から4歳程度まで)に、秩序だった描画するよう要求することは不適切であるという理解の必要がある。また、繰り返し同じ表現をしたり、真似ばかりに終止したりする子どもには、それぞれの状況と興味に応じた適切な支援し、表現の幅を広げる必要があるということもあげられている。

子どもを理解することで、適切な教育を行うことが可能となるという論は、現代の美術教育においても重要となる考え方である。なお、ローウェンフェルドが一般的評価表を掲げるにあたり、「子どもの成長状態の輪郭を知るために用いる」¹⁷⁾と述べている点には留意したい。評価により判別するといった発想・方法は重要な示唆であるという一方、あくまで画一的な基準から子どもを捉えるものである。時代や環境によっては子どもの実態も異なることから、本質的な理解から離れてしまうこともある。発達段階を手掛りとし、教師や親といった教育者が個々の子どもの実際をより深く理解することが必要であると考えられる。ローウェンフェルドの論は、子どもの自由な創造性を尊重するという点から、放任による消極的な教育方法と捉えられやすい。しかし実際は、教育者の役割が極めて重要なものであることが指摘できる。発達の段階を理解し、個々の状況に応じた適切な支援・指導を行うことで、子どもの生来の成長を促すことができるという思想が根本にあると考えられる。

5. 『美術による人間形成』における視覚型と触覚型

『児童美術と創造性』で述べられていたように、ローウェンフェルドは弱視および盲目の子どもによる創作活動を研究し、「視覚型」と「触覚型」という創造的な型があることを発見した。『児童美術と創造性』では主に弱視者や盲児についての内容が目立ったが、『美術による人間形成』では類型を健常児の子どもにも当てはめ、発達段階と関連付けて論じている。

発達段階において、この類型の傾向が表れはじめるのは、擬似写実的段階(11歳から13歳)であるとしている。子どもは視覚的傾向と、非視覚的傾向の両方向に発達するが、どちらかによるとされている。そして決定の時期(13歳から17歳)には、子どもの美術表現を視覚型、触覚型、あるいは中間型の類型にわけることができるとしている。視覚型の子どもがもつ創造活動への関心は、周囲の環境への客観的な態度からうまれる。また、経験の媒介として主に眼をもちいる。触覚型の子どもについては、経験の媒介物は主に身体的な感覚である。自分自身の身体的な感覚や、情緒的な感情といった主観的経験な要素に関心をもつという。なお、「視覚型」と「触覚型」の子どもにおける人物の描写には次の特徴がみられると考えられる。視覚型の子どもは、人物を環境の一部としてとらえる傾向にあり、客観的な場面の印象を描写する。また、人物の外観について強調をするととも

に、写実的な表現をする。一方、触覚型は人物の内観を表現する傾向にある。絵に描かれる人物の感情を主観的にとらえ、自己を投影するように描写する。これらの特徴から、教育者は子どもの類型を理解した上で、個々の欲求にあった指導をすることが必要とされる。視覚型に適している指導方法が、触覚型にとってよいものであるとはかぎらないといえ、その逆も同じである。ローウェンフェルドは「視覚的印象に親しませようと熱心に努力することによって、非視覚型の者の創造力を解放しようと試みるとしたら、それは全くの誤りであるということに気がつかねばならない」¹⁸⁾と述べている。

本書では、これらの類型への理解は、決定期（13歳から17歳）の子どもへの教育において極めて重要なものと述べられている。発達段階上の変化は、情緒と精神における困難をともなうものである。ローウェンフェルドは新しい場面への適応に要する時期を危機と呼び、特に児童期から成熟期へ移る際を「青年期の危機」として重要視している¹⁹⁾。この時期は、視覚型、触覚型、あるいは中間型に子どもの類型が明確に決定され、子どものもつ創作への要求は異なる。決定の時期の指導として、子ども一人ひとりの類型を理解し、個々に応じた励ましや技術的な補助により、特性を伸ばすことが必要であるといえる。

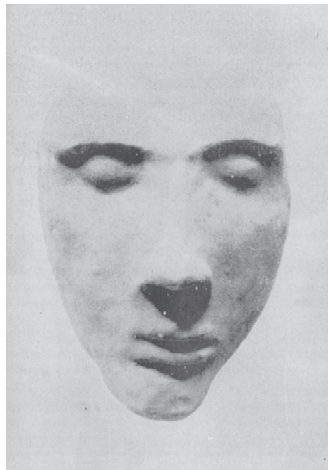


図1 視覚型による「自己像」

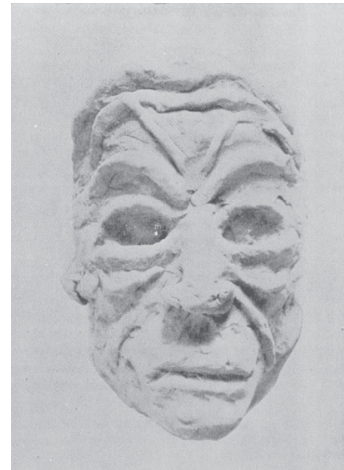


図2 触覚型による「自己像」

原著である“Creative and Mental Growth”の初出版から70年経過した現在では、視覚型や触覚型の類型論に対して、疑問を投げかける指摘もある²⁰⁾。その一方、ローウェンフェルドのような子どもの要求を考慮した上で美術教育を行うべきであるという考え方は、以前として重要であるといえる。適切な教育支援を行うためには、発達段階をはじめとする子どもの実態を知っていなければならない。このようなローウェンフェルドの論は、子どもを理解する姿勢の必要性を実証的かつ実践的に示した点において、美術教育の在り方に対する時代を問わない重要な示唆であると考えられる。

6. 『子どもの絵』から

“Creative and Mental Growth”（邦訳書『美術による人間形成』）が大学のテキスト用の学術書であるのに対して、“Your Child and his Art”（邦訳書『子どもの絵』）は、アメリカにおける6年間の講演の内容に基づいており、親や教師を対象にした書である。子どもの創造的活動を促すために、両親はどのようにすればよいのかについて述べられている。質問に答えるような形式で、子どもの創造活動の事例が説明されている。言葉は平易であるが“Creative and Mental Growth”

と共通する教育観が読み取れる。子どもの経験や想像力を培うことを重視した創造主義の考え方にもとづいている。日本で出版された3冊のうち後に執筆されていること、啓蒙書的な役割をもってことから、子ども絵の指導から評価にわたる全体的な内容について、わかりやすくなっている。

本文の多くは、発達段階にそって、それぞれの時期における子どもの造形表現の特徴を示している。そして、心の中にある経験を自由に芸術表現することが、子どもにとって大切であるとする。見たものをそのまま写實的に表現しようとする視覚型だけでなく、自分が感じたものを主観的に表現しようとする触覚型を位置付け、個性に応じた教育が必要であることを示唆している。

直接経験を重視し、五感を使って考えたり・感じたりする経験を積むことや、いろいろな造形材料を用いて発見したり試したりすることが、子どもの表現能力や創造性を培うことになると指摘されている。「子どもが、自分の心をはたらかせたり、手を使ったりすること、また、見たり、聞いたり、感じたり、さわったりしたものに、鋭敏な反応を示すこと」²¹⁾によって感性を養うこと、「いろいろな芸術材料で、どんなことができるかを発見したり実験したり、すること」²²⁾を大切にするという。

子ども自らが経験することが強調されている点に、ジョン・デューイの生活経験主義の影響を見ることができるといえる。ただし、アメリカにおけるデューイやローウェンフェルドの時代の教育論にとどまることなく、自ら選択・決定する経験、試行錯誤、自分探し、感性や想像力、といったキーワードが並ぶ日本の近年の「新しい教育観」とローウェンフェルドの言説との間に多くの共通点があることに注目したい。

7. 美術教育学の確立への貢献

ヴィクター・ローウェンフェルドの美術教育の理論は、主に描画の発達段階論や、視覚型と非視覚型（触覚型）という表現のタイプ論に示されている。教育界では、指導によって早く成人に近づけようとする、社会に役立つように能力を高めるといった考え方が、顕在化しやすい。ローウェンフェルドは、子どもの描画の発達段階を明らかにすることによって、子どもには、大人の美術とは異なる独自の表現があり、それぞれの時期に適した対応や援助が必要であることを示唆した。

現在でも、いきすぎた指導によって、一見して出来栄のよい作品が仕上がっているようには見えるが、その年代の子どもらしくない描画技術が目についたり、クラスや学校全体の作品が類型化したりして、子ども一人ひとりの個性が希薄になっている状況がある。ローウェンフェルドは、子どもが本来持っている創造性を引き出すことに主眼をおき、その理論的支柱として、描画の発達段階を示した。代表的著書である“Creative and Mental Growth”の書名は、直訳すると創造的および精神的成長であり、描画を中心にした発達論の文献であるといってもよい。ところが、邦訳では、関係者によって『美術による人間形成』という書名がつけられた。邦訳書の普及などに伴い、美術によって人間形成をするということが、日本の美術教育のテーマや目的にもなってきた。『美術による人間形成』というタイトルは、本来の著書の意味からすると異なっているが、子どもの創造性や個性を引き出そうとするローウェンフェルドの精神と共通しており、美術による人間形成の考え方に日本の研究者や読者の関心が向けられた。

ヴィクター・ローウェンフェルドの業績として特記しなければならない事項に、アメリカにおける美術教育研究の確立への貢献がある。美術教育の大学院教育、学会活動等は、アメリカが世界をリードしており、国際美術教育学会InSEAをはじめとした美術教育研究の場でも、アメリカの研究者が多大な役割を担っている。美術教育ではアメリカの大学院が質量ともに充実しており、アメリカ

の大学院において学び、博士や修士の学位を取得した日本の研究者もいる。

ローウェンフェルドはオーストリアからアメリカに渡り、ペンシルバニア州立大学において美術教育の教育と研究に取り組んできた。“Creative and Mental Growth”は、美術教育を専攻する多くの大学・大学院のテキストとして継続して使用されており、ローウェンフェルド没後も、弟子にあたる研究者（ブリテン）との共著書として出版され続けている。美術教育を学ぶにあたって、まずローウェンフェルドの著作の講読から始まるといっても過言ではない。

ペンシルバニア州立大学には、ローウェンフェルド以降も、ケネス・バイテル、ブレント・ウィルソンなど日本でも知られた研究者が教員として所属し、アメリカはもちろん世界の美術教育研究の中心的な研究機関になってきた。その学的な教育環境は、ローウェンフェルドによって基礎が築かれ、ローウェンフェルドに教えを受けた研究者がアメリカの美術教育研究をリードしてきたわけである。

ペンシルバニア州立大学の後継者の研究を概観して興味深いのは、研究の幅広さである。偉大な研究者が出ると、一般的には、その後は先駆者の研究を追随や模倣することにとどまる傾向がある。ところが、ローウェンフェルドの後継者にあたる人々には、むしろ独自の研究領域や方法が見受けられる。バイテルは、描画の科学的・数的な調査をもととしながらも、後に禅についての東洋の思想を取り入れて、人文的・哲学的な論文を多数記述している。また、ウィルソンは、世界中の子どもの描画を収集・分析することを通して、マンガ等の現代の映像視覚文化の影響が大きいことを指摘し、美術作品も含めた視覚情報を積極的に取り入れる美術教育の方法論を提案している。大人による影響をできるだけ避けようとしたローウェンフェルドとは、異なる見解になっている。ローウェンフェルドは、子ども一人ひとりの個性的な表現を大切にしながら、教育研究活動においても自身の研究スタイルに合わせさせるのではなく、各研究者の特徴や創造性を引き出そうとしたことが、ペンシルバニア州立大学の美術教育研究の多様性や発展につながったのであろう。

8. 日本におけるローウェンフェルド研究

戦後の日本は、教育にとどまらず、経済・文化・科学技術などの全ての分野にわたってアメリカをモデルにして発展してきたといってもよい。ローウェンフェルドの美術教育論の紹介や受容も、アメリカの代表的な美術教育理論として、戦後の模索期にあたる時期に積極的に行われた。たとえば、日本におけるローウェンフェルドの受容は、1952年頃から1960年頃までに集中していた、という指摘がある²³⁾。

ローウェンフェルドの著書は、『美術による人間形成』などのようにまとまったかたちで翻訳・出版されることになるが、それ以前にも『美育文化』や『教育美術』といった美術教育関連の雑誌において、研究業績の部分翻訳が掲載された。『美育文化』で1950年代初頭から竹内清がローウェンフェルドによる著作の邦訳を掲載し²⁴⁾、『教育美術』でも1957年に深水正策が邦訳文を載せている²⁵⁾。現在ならばインターネット等による多様な情報伝達の手段があるが、当時は教育雑誌における紹介が主であった。

このような状況の中で、1956年には『子どもの絵』、1960年に『児童美術と造形性』、1963年に『美術教育と人間形成』が翻訳・出版された。アメリカの美術教育の中心的役割を担ってきたローウェンフェルドの著書を翻訳・出版し、広く紹介できたことは、日本の美術教育にとって有益であった。当時は、創造美育協会をはじめとした民間の美術教育運動が盛んな時期であり、子ども中心の教育観にもとづく美術教育運動の理論的な支えとして、ローウェンフェルドの研究が紹介され、受

け入れられていった。美術評論・デザイン論など広い分野で活躍した勝見勝は、『子どもの絵』を翻訳・出版するに際して、日本の創造美育の運動に理論体系が十分でなく、抑圧理論を中心とする心理主義だけでは十分でないという気持ちがあった。このような背景からローウェンフェルドの著作・翻訳を紹介することになったと述べている。

ローウェンフェルドに限らず、海外の教育理論を受容する際には、いくつかのケースがあるように見受けられる。著書や論文の原文をそのまま日本語に翻訳するケース、翻訳されたものを参照し改めて論を組み立てるケース、先行研究の一つとして紹介するケースなどである。竹内清は“Creative and Mental Growth”（邦訳書『美術による人間形成』）の訳者の一人であり、当初は翻訳による紹介に取り組んでいたが、竹内の『創造的発達概論』では、ローウェンフェルドの描画の発達段階に自身が収集した日本の子どもの作品を入れ込みながら子どもの描画の発達について説明している²⁶⁾。

子どもの描画の発達について理解することは、美術教育を学ぶ上での基礎であり、その定説としてローウェンフェルドの発達段階が取り上げられることが多かった。幼児造形の研究者である黒川建一は、「現在いちばん一般的なのは、ピクチャー＝ローウェンフェルドのものであろう」と述べている²⁷⁾。スクリブルや図式期から始まるローウェンフェルドの描画の発達段階論を示すことで、子どもは大人の未熟なものではなく、それぞれの時期において独自の特徴を造形表現があることが知られるようになった。

ローウェンフェルドの著作が紹介・引用されてきたことは確かであるが、一方で、論が誤って理解されてきたのではないかという指摘もある。内田裕子は、ローウェンフェルドが自由放任主義（レッセ・フェール）と誤って受容されたと述べ、理論についてのより本質的な理解に加え、批判的な態度による検討もする必要があるとしている²⁸⁾。大人による干渉をさけることだけに着目すると、子どもへの指導や支援ができないという結論につながってしまう。自己同一化による人間形成の考え方も含めた幅広い視点が求められる。

近年の学会誌・大学の研究紀要等においても、ローウェンフェルドの文献を参照・引用しているものは多く見受けられる。それぞれの論文においてローウェンフェルドがどのように引用されているのか、いかなる評価がされてきたのかを考察することが求められる。このようなローウェンフェルドに関する文献調査、引用部分の内容の検討等については、次の課題にしたい。

9. まとめ

造形表現は多様であり、それぞれの個性をいかすことが求められる。けれども、写實的に描かれた作品が上手な絵として評価され、いわゆる視覚型の表現に応じた美術教育に主眼が置かれてきた。また、小学校における好きな教科の調査で、低学年においては体育とともに図工の好感度は高い。ところが、学年が進むにつれて思ったように描けないということで、苦手意識をもつ子どもが頻出している。ローウェンフェルドは、触覚型（非視覚型）を位置付け、感じたままに表現することの大切さが指摘した。また、「思春期の危機」として、中学生や高校生にあたる年代の美術教育へのアプローチについても論じている。したがって、ローウェンフェルドによる論述内容は、むしろ、現在において重要性が高まっている。

日本の研究者は、スクリブルをはじめとした発達段階論、視覚型と触覚型という表現のタイプ等、それぞれの先行研究としてローウェンフェルドの記述を引用してきた。けれども、もう一方で、人間形成につながる教育観全体については、十分な読み取りができなかったのではないか。また、ロー

ウェンフェルドの発達段階や表現タイプについての記述には、評価の過程や方法がほとんど示されていないので、判断結果や論の進め方についての異論も出てきた。ローウェンフェルド自身も、仮説的な扱いで、それぞれの研究の妥当性については、十分に検証できなかったようにも見受けられる。亡命や美術教育の研究組織の運営等で多忙を極める中での執筆であった。ローウェンフェルドの美術教育を検討し、現代の美術教育にいかしていくようにしたい。

教育学者の水越敏行によれば、子ども中心の教員観と教科主義の教育観とが周期をもって繰り返されてきたという²⁹⁾。ローウェンフェルドの没後20年ほどたった1980年代以降のアメリカの美術教育では、DBAEの動向が顕著になり、美学・美術批評・美術史・美術制作の4領域による体系的な美術教育が展開されてきた。子ども中心の教育から教科主義の教育への転換があったといえる。学問としての美術をいかに体系的に教えていくことができるのかが問われてきた。日本でも学力低下の論争がおき、教科主義の教育の動向が見受けられるようになっている。

そのような近年の動向の中で、ローウェンフェルドの創造主義的な美術教育は、社会の変化と離れた教育論として見なされてしまうかもしれない。しかし、子ども一人ひとりの個性的な表現を大切に考える考え、多くの教育実践や作品を通して子どもの造形表現の道筋や傾向を分析する方法には、普遍性がある。

注

- 1) 辻泰秀 山田唯仁 「ハーバート・リードの『芸術による教育』の現代性」 岐阜大学教育学部研究報告 人文科学 65巻1号 2016
- 2) 人名や生年でさえ、文献によって異なることがある。たとえば『児童美術と創造性』はローウェンフェルト、『美術による人間形成』はローウェンフェルド、『子どもの絵』ローエンフェルドとなっており、それぞれ異なる。一般的には、学術的な『美術による人間形成』にしたがっている。
- 3) 長谷川哲哉 「V.ローウェンフェルドのミューズ教育論」 『アート・エデュケーション』 No.29 1999 を参照。ローウェンフェルドはユダヤ系オーストリア人であり、ナチスによる迫害にあったこと、ドイツのミューズ教育を土台としていること、リードとローウェンフェルドの間には交流があり、リードがローウェンフェルドの亡命や、収集作品の保護に尽力したことが述べられている。渡米前のオーストリアにおける環境については、山木朝彦 「ローウェンフェルドの軌跡」 『アート・エデュケーション』 Vol.1 No.3 1983 を参照。
- 4) 原著のタイトルは、“The Nature of Creative Activity” (創造的活動の本質) である。オーストリアの盲学校での勤務経験をもとにして1938年に現地で執筆され、ナチスによる迫害の影響で、翌年1939年にロンドンで英訳本が出版された。日本では、水沢孝策による訳で、美術出版社から発刊された。
- 5) V.ローウェンフェルド 『美術による人間形成』 竹内清 堀内敏 武井勝雄 訳 黎明書房 1963 近年アメリカにおいてテキストとして使用されているものは、ローウェンフェルドに師事したW.L.ブリテンとの共著になっており、ブリテンによって再編・加筆されている。
- 6) 原書は、“Your Child and his Art” Newyork Macmillion Company 1954 [(『子どもの絵 両親と先生への手引き』 勝見勝(訳)白揚社 1956)]
- 7) 前掲(5) 書
- 8) 花篤實 「美術教育による人間形成論の流れーヴィクター・ローウェンフェルドを中心にー」 大橋皓也・宮脇理編著 『美術教育論ノート』 開隆堂 1982 pp.81-82
- 9) 山田一美 「ローウェンフェルドの発達段階理論とはどのようなものですか」 福田隆真 他編 『美術科教育の基礎知識』 2010 p.54

- 10) 前掲 (5) 書 p. 29
- 11) 前掲 (5) 書 p. 39
- 12) 前掲 (5) 書 p. 29
- 13) 前掲 (5) 書 p. 51
- 14) 前掲 (5) 書 p. 52
- 15) 前掲 (5) 書 p. 52
- 16) 『美術による人間形成』における各発達段階についての要約を抜粋・引用し、表1を作成した。以下は引用したページの詳細である。なぐり描きの段階(2歳から4歳)p. 142。様式化前の段階(4歳から7歳)p. 169。様式化の段階(7歳から9歳) p. 221。写実的傾向の芽生え(9歳から11歳)p. 261。擬似写実的段階(11歳から13歳)p. 307。決定の時期・青年期の危機(13歳から17歳)p. 486。
- 17) 前掲 (5) 書 p. 109
- 18) 前掲 (5) 書 p. 330
- 19) 前掲 (5) 書 p. 321
- 20) 前掲 (9) 書 p. 54
- 21) 前掲 (6) 書 p. 33
- 22) 前掲 (6) 書 p. 27
- 23) 内田裕子 「V. ローウェンフェルドの造形教育理論についての研究」博士論文 筑波大学 1998 p. 259
この博士論文はローウェンフェルドの人物像や思想、美術教育史における位置といった網羅的な内容を扱っている。内田による研究が集大となった論文であるといえる。
- 24) 特に竹内清は、ローウェンフェルドの発達段階説を邦訳し積極的に紹介していた。なお竹内は『美育文化』において、1952年と1953年にかけて8回にわたり“Creative and Mental Growth”の訳文を掲載している。前掲 (5) 書 p. 9
- 25) V. ローウェンフェルド 「盲児・聾盲児・精薄者たちと創造活動 -1-」『教育美術』 No. 18. 10 深水正策 (訳) 教育美術振興会 1957 pp. 9-17 なお同年内に、『教育美術』に続編を掲載している。
- 26) 竹内清 『創造的発達概論 -成長のための図工科教育-』黎明書房 1957
- 27) 黒川健一 『実践造形教育大系 8 絵の発達とその見方』開隆堂出版 1982 p. 33
- 28) 前掲 (23) 書 pp. 264-269
- 29) 水越敏行 『総合的学習の理論と展開』明治図書 1998 pp. 7-8

図版出展

- 図1 V. ローウェンフェルド 『美術による人間形成』竹内清 堀ノ内敏 武井勝雄(訳)黎明書房 1962 p. 565
- 図2 同上書 p. 566

付記

本稿の作成に際して、1. 2. 6. 7. 9を辻、3. 4. 5を山田、8を辻と山田が担当した。